

講演

セッションハウス ダンス企画の軌跡

伊藤 直子

「クレイジー！！」

1989年、私は所属していた渡辺モダンダンスカンパニーから独立。アメリカから来日中のダンサー、ニーナ・B・ワーネスのプロジェクトに参加。ジャズ・ミュージシャンとのコラボレーションを中心とした、在日外国人アーティスト達の活動の中に身を置いていました。ジャズ・ライブ・ハウスを中心とした活動の中で、たまには劇場空間での作品発表をしたいとレンタル公演予算を立てた時のニーナの反応が、冒頭の「クレイジー！！」。日本的な予算が外国人アーティストにとっては信じられないものであったようです。そのときは日仏学院の協力でホール公演を実施。プレス資料を持参しての売込みをはじめ、サポート体制の中で公演を実施した初めての体験でした。

1991年、ニーナ達との活動から自由な発表の場の必要性を感じセッションハウスを設立、地下スタジオでまずはダンスクラス開校からスタートしました。このダンスクラスがセッションハウスの運営母体です。

第一期（1991～1997年）「無知からの出発」

夢だけは大きく、“世界への発信”をスローガンに掲げる無謀さ！ダンスをしていたという経験だけで始めた事業は、知らないことばかりでした。東西の壁が壊れ、価値観の変容がダンスの世界でも始まっていたようで、セッションハウスにもフリーな立場で表現の場を探し、作品を発表したいと願う若者たちが集まってきました。彼らの特徴は、セルフ・プロデュースする意欲や意識を持っていることでした。自分たちが楽しいと感じていることを伝えたい、観て貰いたい、それを仕事にしたい、という彼らの願いをカタチにすることから、セッションハウス・ダンス・プログラムは始まりました。“個人の夢や希望の芽をつまない”ということの基本コンセプトとして、これまでの企画を実施してきました。

第一期のダンサーで現在も独自の活動を精力的に続けているのが、「イデビアン・クルー」の井手茂太さんや「コンドルズ」の近藤良平さん達です。井手さんは、「自分の作品を発表する単独公演をしたい。ダンサーにギャランティを払いたい」と、目的と結果を最初から打ち出してきましたので、それを可能にするために、公演システムを共

に考えました。近藤さんからは「神戸コンクール（全日本高校大学ダンスフェスティバルー神戸）の楽屋で出会った男だけの集団で作品を創りたい」という希望があったことから始まり、近藤さんを中心とした様々なダンス・プログラムに発展しました。

第二期（1997～2001年）「混沌の中の活動」

ダンスクラスの運営が安定し、セッションハウスが自転車操業ながら自力で動き出したのは1997年、設立してから6年目に入ってからのことです。97年は、ノンセレクトの公演事業「シアター21・フェス」（以下「21・フェス」）を開始した年でもあります。表現はますます多様になり、身体表現を模索する若者達も増加の一途をたどっています。

これまでの「21・フェス」の出演者をみると、世界を舞台に自分を必要とする場を探し活動をし始めており、それぞれの境界の越え方に、このダンスの楽しさ、広がり、そして可能性を感じます。「21・フェス」では、vol.1からvol.42（2003年11月）までで698作品、延べ1965人の参加を得ています。また2003年度は30企画68公演を実施、約5300人の観客を動員、80%の入場率です。

劇場公演の大変さはやはり費用です。劇場費、スタッフ費、広報費のすべてをチケット収入でまかなうことは困難です。恒常的なダンス公演の実施を無謀な夢の第一番目においていた私達は、それを可能にするための公演システムを考えました。

- ①独自のテクニカル・スタッフを養成すること
最初に取り組んだのが、テクニカル・スタッフの養成です。若手ダンサーの作品を支えるとともに、若手スタッフを育てて下さった、プロの照明家、音響家の方々なしには、現在のノンセレクトのセッションハウス・ダンス・プログラムはあり得ません。
- ②企画を実施するための制作スタッフを養成すること

広報活動に必要な人材養成も、専門のアートマネジメントの知識がないままに始まりました。ダンスでは生活できない、しかし意欲も熱意もあるダンサー達を中心に集った任意団体「セッションハウス企画室」を設立。現

在、全てのダンス・プログラムを独自のテクニカル・スタッフ、制作スタッフがフル活動で支えています。

第三期（2001～2003年）「企画の多様化と充実」

2000年度より3年間の（財）セゾン文化財団からの助成は、私達の活動を支援し後押ししてくれる出来事でした。民間施設としてのプログラム企画に社会性をもたらしてくれたことが、その後の活動に大きな広がりを与えました。公演企画だけのプログラムから各現場の専門家を呼んでのシンポジウムを実施することが出来、ダンスを多角的に捉えるきっかけとなりました。

第三期に入り、「21・フェス」シリーズだけではなく、育ってきたダンサーのための単独公演「D zone」、観客参加型「リング企画～ダンスの値段はあなたが決めて～」、作品を育てるためのワークショップと公演の連動型「ラッキー・ビンゴ・プロジェクト」など、色々なレベルのダンサー達と、様々な企画を実施しています。

この時期に生まれたダンスはまるっきりの身体表現というよりは、他ジャンルとのコラボレーション作品が多くなってきました。時代と身体性との関係がダンスにも影響しているのでしょうか。

第四期（2003年～）「外へのモサク」

毎年3月に実施している「ユニバーシティ・ダンス・クロス（UDC）」は、神戸コンクールで知り合った全国のダンス大学生達による公演です。“神戸では一生懸命競い合い、UDCでは競わないことをする”と言って3年前から始まり、毎回、60人近い参加者が一同に集まり一つの流れのある公演を創作、元気で明るくて何かをプレゼントしたいという、溢れんばかりのパワーに満ちたダンスが・・・バクレッツします。彼らの多くが先生になって子供達と出会うので、大学ダンスは直接未来と結びついた可能性を持っています。他者との共存の現在形、未来形を同時にあわせ持った大学ダンスに注目し、今後も作品の独自性や可能性等、新しいダンスの芽吹きを見続けていきたいと考えます。

また、第四期より海外に留学し活躍しているダンサー達の力を後輩の指導に向ける「育てて、外へ。」企画が新たに始まりました。これからは、ダンサー達との共同作業をセッションハウスの外へ向かってもう一歩進めていくことが、重要なテーマとなっていくでしょう。時代とともにあるひとりひとりの身体の叫びを作品にするのが、振付家・ダンサーの役目なら、その作品をより多くの人に届けるのが企画する側の役割なのでしょう。その届け方の新しい方法を探るのもこのダンスの先鋭性の一つと考え、「外へのモサク」を続けます。